

早稲田大学英文学会・英語英文学会

2022年度 合同大会

発表要旨集

主 催 早稲田大学 英文学会
早稲田大学 英語英文学会

期 日 2022年12月3日（土）13：00より

会 場 早稲田大学早稲田キャンパス
14号館・16号館

お問い合わせ先：myao@aoni.waseda.jp（早稲田大学英文学会事務局）
eigoibun-joshu@list.waseda.jp（早稲田大学英語英文学会事務局）

合同大会 発表要項

分野（英文学）第1発表室（16-703 教室）

オスカー・ワイルドの童話作品における寓意性と芸術論

文学研究科 博士2年 石川 亮太

オスカー・ワイルドは唯美主義、芸術のための芸術という考え方で知られる作家だが、愛他主義に溢れる童話作品を描いたことでも知られる。とはいえ、『ドリアン・グレイの肖像』の序文で「道徳的な書物とか非道徳的な書物といったものは存在しない」と断じるワイルドが教訓の意味を込めて童話作品を書いたとは考えがたい。

ワイルドの描く愛他的な行動を含む作品が必ずしもその愛他的振る舞いを奨励しているとは限らない。少なくともワイルドは作品内に描かれる善悪で作品そのものを判断することをよしとしないことは『ドリアン・グレイの肖像』の序文の「善も悪も芸術家にとっては芸術の素材にすぎぬ」という文言からも察することができる。

その点でドイツの童話作家ミヒャエル・エンデも同様の考えを持っており、エンデはヨーゼフ・ボイスとの対談で「もともと私は、読者が私と同じ程度には賢明で、啓蒙されている、という点から出発します。いったいなにを読者に教えろと言うのですか？」と述べているように、作品は読者を啓蒙するものではないという立場にある。

それでは、ワイルドの童話作品からは何を読み取ることができるのか、その糸口はワイルドと同様に芸術に大きな関心を寄せたエンデから得られる。エンデはボイスとの対談で「木を植えるのは、リンゴがほしいからというだけではない。ただ美しいからという理由だけで植えることもある。なにかの役に立つから、というだけでなく、存在しているということが大切なんです」と述べている。

ワイルドの童話作品は、エンデのリンゴの木の比喩にあるようにあくまで美の表現方法のひとつだと考えられる。

ワイルドの童話作品「ナイチンゲールとばらの花」では、ナイチンゲールが命がけで用意した赤い薔薇を踏みにじられた学生は「じっさい、恋なんてまったく非現実的だ、そして現代では現実的であることがすべてなんだから」と吐き捨てる。

ワイルドはその「現実的」という言葉を用いて「芸術家としての批評家」で次のように述べている。「感情のための感情こそが芸術の目的だからであり、人生の、およびわれわれが社会と呼んでいるあの人生の実際的編成の目的は行為のための感情であるからだ。……芸術がわれわれの胸中に喚起するあの美しい不毛の感情は社会の目には憎むべきものであり……」

ワイルドの言う「感情のための感情」はエンデのリンゴの木の比喩における「ただ美しいから」という理由で木を植えることにあたり、ワイルドの言う「行為のための感情」は「リンゴがほしいから」という実際的な目的があって木を植えることにあたる。

以上、ワイルドは善悪を芸術の素材として認識しているということ、美を芸術の目的としていることから、童話作品に教訓的な寓意を持たせているとは考えられず、本発表では、ワイルドの童話作品は道徳的な意図をもって書かれたものではなく、どのように美的なものであるのかを検証していく。

合同大会 発表要項

分野 (英文学) 第1発表室 (16-703 教室)

Affective Disconnection in E.M. Forster's *A Passage to India*: Smell and Touch

早稲田大学本庄高等学院非常勤講師 田口 嵩人

As is shown in the epigram “Only connect . . .,” in *Howards End* (1910), E.M. Forster (1879-1970) repeatedly deals with the theme of “connection with others” in his novels. In *A Passage to India* (1924), Forster searches connection between British and Indian people, among the English in India, and among Indians, mainly Muslims and Hindus. Previous studies have explained how and why the connection failed, mainly based on modernity and post-colonial perspectives. These studies have a trend to argue the impossibility of connection in *Passage* in their own approaches, but they tend to pay less attention to Forster’s positive views on the achievement of connection, despite Forster’s ambiguous attitudes in his novels.

This research, therefore, focuses on affect of “lower” senses, olfactory and tactile perception, to discuss the mechanism of connection/disconnection in *Passage*. This is because affect has a dynamic power to intersubjectively connect an individual with others, so it is effective to examine whether dynamics of affect can establish intersubjective connection among Forster’s characters. Here, Walter Benjamin’s view of “lower” senses is useful because they enable one to perceive the past images without going through languages in the age of modernity. Among the traits of smell and touch, retrospectivity is effective to argue whether connection is accomplished. Affect of “lower” senses reminds perceivers of the past images of tradition, enabling them to share tradition, and finally intersubjectively connecting them with each other.

Olfactory and tactile affect once establish superficial and temporal connection between Indian and British people, and among British people in Mosque part in *Passage*. In Caves part, smell and touch impactfully show the impossibility of connection between Indian and British, also explaining the discord between Muslims and Hindus. Tactile affect in Temple part finally indicates the future hope of connection between Indians and English people.

合同大会 発表要項

分野（英文学）第1発表室（16-703 教室）

ヴァージニア・ウルフにおける女性的なもの：エクリチュール・フェミニン再考

東京大学人文社会系研究科 修士3年 松本 夏織

1929年の著作『自分ひとりの部屋』(*A Room of One's Own*)において、英国作家ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) は、男性が発明した現行の文体は女性が使うには不向きであるため、女性作家は「女性のための文体」を模索する必要があると記した。この問題意識は、1970年代にエレーヌ・シクスー (Hélène Cixous)、ジュリア・クリステヴァ (Julia Kristeva)、リュス・イリガライ (Luce Irigaray) など「フレンチ・フェミニスト」らによって展開されたエクリチュール・フェミニン (*écriture féminine*) の思想実践と通底している。

一方、フランス思想を理論構築の礎としたジュディス・バトラー (Judith Butler) は、「女性とは何か」を境界づける言語や法を問題化し、より包括的な連帯の政治への道を照らしたが、その際に展開した「フレンチ・フェミニズム=本質主義」という図式が、エクリチュール・フェミニン理論の単純化とともに広く定着してしまったように思われる。『自分ひとりの部屋』は性に囚われることなく「ひとりの人間」として生きる世界を提案すると同時に、女性であるがゆえに受ける性差別の存在を指摘する一見両義的なテキストであるが、バトラーへの応答なしに、エクリチュール・フェミニンをウルフ分析に援用することは、ウルフのフェミニズム思想を男女二元論や本質主義の枠組みへと追いやりにかねない。

以上を背景に本発表は、性差をすり抜けるエクリチュール・フェミニンの解釈枠組みを提示し、ウルフの文体・フェミニズム思想を性別二元論に寄らない「非-男性」の観点から包括的に捉え直すことを目的とする。そのために、イリガライの論考を導きの糸に、バトラーの「女」の解体・再構築論からエクリチュール・フェミニンを批判的に再読し、バトラーと「フレンチ・フェミニズム」の対立的視点から統合的視点への転換を示す。この分析を通して刷新された視座から、「女性の文体」を起点に生じたウルフの問いを見てゆきたい。

合同大会 発表要項

分野（英文学）第1発表室（16-703教室）

A Study on the Narrative Methods of *To the Lighthouse*

文学研究科 修士2年 ZHAO Minyi

Virginia Woolf, James Joyce and William Faulkner are known as masters of stream of consciousness. They have made great contribution to innovation of psychological novels. As a female writer, Woolf's role is very unique and distinctive. John Galsworthy, who claimed that Woolf's writing had both academic and popular range of literature, responsible for the shaping of two central strands of academic critical enquiry- modernism and feminism.

Scholars have done many researches on Woolf. The researches are almost full of every aspect, such as her life experiences, her diaries and letters, her modernism and feminism...even many other studies that reflect the range of positions available in literary criticism. This paper aims at using Mikhail Bakhtin's dialogue theory and narrative discourse theory of Gerald Genette's *Narrative Discourse* to analyze the dialogue and how Woolf presents different characters' thoughts and feelings in *To the Lighthouse*. One of the most important terms in dialogical relations is "polyphony". Polyphony is a musical term that refers to the joint unfolding of different voices, and in Bakhtin's conception it is used to describe the difference among traditional novels (e.g., Tolstoy's novels), where the characters are under the unified consciousness of the author. In dialogue novels characters have their own independent consciousness and are equal to the author, and a dialogue can be formed among them.

Woolf embodies Bakhtin's dialogic nature in her works. She advocates depicting the spirit of the characters and for the author to be objective, not to judge the characters but to let them express themselves as individuals who have their own consciousness. This way of writing can create a stereoscopic and complete character, meanwhile readers can feel and understand the author's and characters' consciousness.

合同大会 発表要項

分野 (アメリカ・カナダ文学) 第2発表室 (16-705 教室)

The Zoo Story に見られる他者論的葛藤とクィア作家としての Edward Albee の特異性

文学研究科 博士2年 中西 亮介

アメリカ人劇作家エドワード・オールビー (Edward Albee) は、処女戯曲『動物園物語』(*The Zoo Story*) (1959) で対立する二様の他者論を提示する。二者の対立はまなざしと顔という極めて演劇的な要素により表象される。

まず主人公 ジェリー (Jerry) の、もう一人の主人公ピーター (Peter) に対する無遠慮で攻撃的なまなざしは、劇中終始一貫してト書きやジェリー、ピーター双方の台詞から読み取り得る。このまなざしはピーターを「すっかり知ろう」とするジェリーの欲望に同期すると、戯曲の精読により明らかとなる。1950年代アメリカに輸入され、席卷したフランスの J.-P. サルトル (J.-P. Sartre) による実存主義哲学では、自己と他者との相克が、対峙する相手の主体性を剥ぎとり客体化する—「所有」するために各々が発する「まなざし」の交錯という比喩で表現された。ジェリーのまなざしは劇中でサルトル的な「まなざし」としての効果を実に有しており、作者オールビーの他者論の一側面を象徴するものだと読み取り得る。伝記によると彼は『動物園物語』執筆の直前、サルトルと関係の深いクィア作家ジャン・ジュネ (Jean Genet) の戯曲のアメリカ公演と、アメリカ人劇作家、クィア劇作家の先達であり、独自に実存的な他者論を有するテネシー・ウィリアムズ (Tennessee Williams) の作品の上演に影響を受けた。まなざしによる実存主義色の強い他者論の開陳は、大西洋を越えたクィア作家のコミュニティの間で共有—伝承された情動としても解釈が可能だ。

一方で、『動物園物語』内においてジェリーのまなざしが孕む欲望は、その先に待ち受けるピーターの顔によって常に挫折する。サルトルが説くまなざしの相克に対し、その先には客体化作用を超越する「顔」が他者の存在から立ち上り、まなざしの主体に応答責任を課すとユダヤ系哲学者 エマニュエル・レヴィナス (Emmanuel Levinas) は説いた。劇中でピーターの顔はレヴィナスが比喩的に用いる「顔」を具象している。相対する二様の他者論はかく葛藤し、それ自体で『動物園物語』のドラマツルギーを形成するのだ。オールビーは、ユダヤ人を初めとするマイノリティに対する養父母の差別を強い印象と共に記憶しており、その記憶が複数の創作へ影響していると伝記作家のメル・ガソウ (Mel Gussow) は指摘する。『動物園物語』に現れる「顔」は、他のクィア作家らの実存主義的他者観から逸脱する對他者倫理であり、当時のアメリカではオールビーの身体に固有のものだ。 *A Delicate Balance* (1963) では「顔」は単なる顔ではなく、人格として変奏され出現する。

作品発表当時はジェイムズ・ボールドウィン (James Baldwin) のように、クィア或いはマイノリティ当事者として自分の所属するコミュニティの声を表象—代表 (represent) することが、クィア作家に主流の創作戦略であった。自身が決して所属できぬコミュニティの存在や、それへ向ける自身のまなざしの攻撃性への自覚がオールビーに他者論的葛藤を強いる。そのアンビヴァレントな提示にこそクィア作家としての彼の特異点が存するのだ。

戦争を知らないホールデン・コールフィールド

—*The Catcher in the Rye* における「戦争を語ること」

文学研究科 修士1年 川島 広大

The Catcher in the Rye (1951) の主人公、ホールデン・コールフィールドの成立の過程には作者が従軍した第二次世界大戦が大きく関わっている。実際、彼が第二次大戦に赴き、死亡したという設定の物語さえ書かれた。しかし、*Catcher* のホールデンにおいて、数年前に終結したその「戦争」の傷痕は抹消されている。本発表では、なぜホールデンが戦争に関して無知な語り手として書かれ直したのか考えてみたい。

サリンジャーは元来、戦争を語ることに独自の倫理観を抱いていた。たとえば、“*Last Day of the Last Furlough*” (1944) において、主人公のベーブは戦争とヒロイズムの関連を指摘する。続編の“*Stranger*” (1945) では、実際に戦争体験を経たベーブは嘘を徹底的に拒絶したいと望み、ついに「語るができない」という心境に達する。*Catcher* でも戦争映画に対する厳しい批判が描かれるように、ホールデンにもこうした戦争を語ることにまつわる反ヒロイズム的な精神性が受け継がれたことは明らかだろう。

しかし、ホールデンは「戦争を知らない」。そのことは、18章の最後で描かれる兄 D・B の従軍体験に対する、思慮を欠いた発言から読み解くことができる。この箇所は戦後の D・B もまた「戦争」を語ることに困難を抱えていた可能性を示唆する。とりわけ、生前の末弟アリーに「作家として語るものがたくさん得られたのではないかと尋ねられた際に、何も答えず、野球ミットを取りに行かせ、ルパート・ブルックとエミリー・ディキンソンのどちらが優れた戦争詩人か尋ねるというエピソードは象徴的である。だが、ホールデンが語る物語の時点では「戦争」を語れない D・B は「ハリウッドに身売りし」てしまっている。

それでは、作者は「戦争を知らない」ホールデンに何を語らせるのか。それは「戦後」という新たな舞台である。*Catcher* の2章には下敷きとなる作品 “*I’m Crazy*” (1944) があるが、両者を比較すると前者のテキスト中には「戦後」という時代意識が横たわっているのがわかる。この *Catcher* 冒頭で述べられる冷戦自由主義的な「生」の定義が、ホールデンをして、そこから疎外された者、すなわち「死者」に意識を向けさせる。愛しい死者を顧みることなく、空虚な自由主義を推し進める「戦後」という時代が「戦争を知った」サリンジャーと「戦争を知らない」ホールデンを隔てていたものを取り払うのである。

この議論を「語ること」に適応すると、彼らが共通して抱く「生」からこぼれ落ちる／たものへの親近感とは、それらについて「語る」必要性なのだと言い換えることができる。そもそもサリンジャーにとっては、ホールデン自体が一度「生」からこぼれ落ちてしまった存在であり、その物語が「つかまえ手」の物語だということは二重に示唆的である。サリンジャーにとって、手のひらからこぼれ落ちていく「生」を「つかまえ」ようとするホールデンは、それ自体、彼の「語りえぬ戦争」の象徴だったのではないか。

合同大会 発表要項

分野 (アメリカ・カナダ文学) 第2発表室 (16-705 教室)

Margaret Atwood, *MaddAddam Trilogy* における Amanda Payne の芸術作品

文学研究科 博士4年 巖谷 薫

Margaret Atwood (1939-) はカナダ在住の現代作家で、代表作 *The Handmaid Tale* (1986) ほか多数の作品を発表し、ブッカー賞の受賞等で国際的に活躍している。*MaddAddam Trilogy* (2003-2013) では近未来の北米を舞台とし、バイオテクノロジーと結託したグローバル資本主義が極端に進んだ世界を思索する。

第一作 *Oryx and Crake* (2003) では科学者 Crake が次世代の人類 Crakers を創り世界に感染症を大流行させて人類はほぼ消滅した。彼の友人 Jimmy は Crakers を世話しサバイバル生活を送る。バイオテクノロジーによる生物の開発等、現在から近未来の実際的な問題と、人間とは何かというポストヒューマンの視点を提示する一方、Atwood は Crake に科学を、Jimmy に芸術(主に言語芸術)および人文学を表象させ、本作品のほとんどを三人称によって Jimmy の内面を描くことに費やす。その結果、彼女の真の目的は芸術・人文学擁護ではないか、と思わせる。Crake と Jimmy の間では「リアリティ」をめぐる会話が頻繁に登場するが、各自が捉えるそれはどのように違うのか。これを検討する上で、第一作の後半で Jimmy の元恋人として登場する女性 Amanda Payne の Bio-art 作品「ハゲタカの彫刻」(“Vulture Sculptures”) と第二作 *The Year of Flood* (2009) に登場する「生きた言葉」(“The Living Word”) の描かれ方を分析する。これによって、本三部作全体に通底する重要なテーマとして、言葉とものとの関係、およびリアリティについて考えることが目的である。

本三部作で、世界は大企業に携わる人々が暮らす所有地 “Compound” とそれ以外の人々が暮らす “Pleebland” (直訳すれば「奴隷地帯」) に二分される。Amanda は Pleebland 出身だが Jimmy は Compound で育った。つまり Amanda は分断された両世界の接点となる。また彼女は国境に接する土地テキサスの出身だ。第三作目では Crakers の子供を産み次世代の人類との掛橋となる。異質なものの接点として描かれる彼女の特徴はどのように彼女の作品に表れ、作品はどのように「言葉ともの」の接点となっているのか。

Susan Watkins は現代ポスト・アポカリプス作品群におけるテクノ・サイエンスとジェンダーの関係を論じる中で、エコ・クリティシズムの流れの一つ Material Feminisms に基づき、Amanda の作品 “Living Word” を「言語、物質、自然と文化が衝突、共存し、ネットワーク内で相互作用しながら変化を起こす (“intra-act”する) コンタクト・ゾーン (66)」と表現する。これを先行研究として踏まえながらも、テキストに基づくより詳細な検討を行うことで、三部作全体での Amanda Payne による作品の意義について考えたい。¹

¹ Watkins, Susan. “Science, Nature and Matter.” *Contemporary Women's Post-Apocalyptic Fiction*, Palgrave, 2020.

A Review of Concepts of Language Assessment Literacy (LAL) and the Development of a LAL Profiling Instrument for Teachers in Japan

教育学研究科 修士1年 溝口 龍平

Language assessment literacy (LAL) is generally defined as essential knowledge, skills, and principles that stakeholders should possess to work on assessment practices (Davies, 2008). Over the last two decades, various studies targeting language teachers have been conducted around the world, exploring teachers' LAL levels, assessment training needs, and factors related to LAL development. Vogt and Tsagari (2014) and Tsagari and Vogt (2017) investigated language teachers' experiences and needs of LAL training in seven European countries. The authors found the general lack of LAL training, indicating that the assessment practice has hardly improved because teachers' insufficient LAL forces them to assess learners as the teachers themselves had been assessed. In addition, these previous studies have indicated that the LAL training experience and needs differ across different contexts, necessitating the localized descriptions of LAL. In Japan, the core curriculum (MEXT, 2017) describes assessment as one of the competencies that pre-service teachers should develop. To foster teachers' LAL, effective assessment training should be conducted (Deluca, Chaves, Bellara & Cao, 2013) according to their training needs. With this background, the current study aims to identify hypothetical and contextual dimensions of LAL of Japanese EFL teachers.

This mixed-method study comprises two parts, a quantitative questionnaire survey and qualitative follow-up interviews. First, the result from a localized questionnaire modified from the Language Assessment Literacy Survey (Kremmel & Harding, 2020) will identify Japanese teachers' LAL needs based on an exploratory factor analysis. Second, follow-up interviews with some in-service teachers will be conducted to identify more detailed LAL needs and interpretations of the items in the questionnaire. In this presentation, I will introduce the historical development of LAL concepts and the process of developing the questionnaire in Japan based on the result of a semi-structured interview with three in-service teachers.

**Analysis of Tasks in Japanese Junior High School English Textbooks:
How Much Do the New Textbooks Encourage Students' Communication?**

教育学研究科 修士2年 堀尾 葵

From the revision of the Course of Study in 1998, Communicative Language Teaching has been the main focus in teaching English in Japanese schools (Hama,2017). In addition, the revision in 2018 highlighted that students are required to think by themselves and to express their thoughts and opinions in English (MEXT, 2017). Although the importance of presenting thoughts and communicating in English is discussed recently, not all classrooms seem to succeed in taking the CLT approach (Hama, 2017). However, regardless of success in the CLT approach, most classes and teachers use textbooks. If teachers are able to use textbooks which include effective tasks to encourage students' communication, there will be less gap in the quality of the English classes students will receive, throughout the country. Here in this study, tasks which interaction is necessary is investigated to see how well they actually promote authentic meaningful communication between students, using the 4 criteria which Ellis and Shintani have developed (Ellis, 2003; Ellis & Shintani, 2014). The analysis targets are tasks in junior high school English textbooks from 4 publishers, first published in 2016 and in 2021 which are approved by the Ministry of Education in Japan. As the result of coding based on the criteria, "having a gap" was the criteria which was most met for tasks in both textbooks. Criteria of "having focus on meaning," "requiring students to use their own resource," and "having outcome other than the use of language" were all met with a low percentage among the target tasks, however, the new textbooks published in 2021 included about twice as much tasks which met the 3 criteria compared with those published in 2016.

Examining the Effects of Integrated Practices of Explicit English Phonetic Instruction and Communicative Tasks for Japanese University Students: The Research Design

教育学研究科 博士1年 工藤 秀平

In recent years, second language (L2) pronunciation instruction has emphasized understandable pronunciation rather than native-like pronunciation as a realistic goal for adult L2 learners to achieve successful communication, more and more attention being paid to L2 speech comprehensibility (Levis, 2005; Derwing & Munro, 2009). Some previous studies have substantiated that explicit L2 pronunciation instruction (e.g., segmental or suprasegmental features) can be effective for improvement in learner's L2 speech comprehensibility (Thomson & Derwing, 2015). However, few studies have addressed the integrated instruction of these two features (e.g., Gordon & Darcy, 2019) and further empirical evidence is required in this area. Therefore, the purpose of this study is to discuss an appropriate research design that I plan to conduct next year to examine the effectiveness of explicit L2 pronunciation instruction including both segmental and suprasegmental features. In this study, the author is planning to adopt a pre-post experimental design with an experimental and control group to investigate the effects of the phonetic instruction. The experimental group will receive thirty-minutes English pronunciation instruction and engage in communicative tasks to practice weekly target items in each session, once a week for a total of 10 weeks while the control group will do vocabulary instruction the same number of times. The contents and procedure of the phonetic instruction is based on "A Communicative Framework for Teaching Pronunciation" (Celce-Murcia et al., 2010), a teaching method that integrates explicit pronunciation instruction and communicative activity practice. Other tentative, more detailed research methods will be discussed in presentation.

The Utopia of Play in Shakespeare Translations and Adaptations

文学研究科 博士2年 SHIN Hyerin

In *Homo Ludens*, Johan Huizinga emphasizes the secludedness of play as one of its main characteristics: “Inside the play-ground an absolute and peculiar order reigns. Here we come across another, very positive feature of play: it creates order, is order. Into an imperfect world and into the confusion of life it brings a temporary, a limited perfection. Play demands order absolute and supreme. [...] All play has its rules. They determine what ‘holds’ in the temporary world circumscribed by play. The rules of a game are absolutely binding and allow no doubt” (10-11). Because every play follows its own rules, which are not necessarily similar to those governing our reality, play—including stage performances—is a utopian activity. Theater is arguably even closer to the realization of utopia compared to static forms of art, in that it involves the physical presence of the playground, the players, and the audience.

In this presentation, I explore how this utopian quality of play is manifested in the relationship between the original drama and its transformations, using Korean translations and adaptations of Shakespeare’s plays as examples. First, I argue that the early 20th century Korean translations of *Julius Caesar* challenge the definition of play itself by eliminating the physical stage, and replacing it with the text itself serving as the utopian site for both the translator and the readers. Then, I discuss the possibility of utopia constructed in the digital world, enabled in the modern age by the development of computer technology, through the adaptations of *Hamlet* and *The Merchant of Venice* in the Korean MMORPG *Mabinogi*.

合同大会 発表要項

分野（英文学・文化）第4発表室（16-708教室）

アスラン像再考

—『馬とその少年』に見る「北方」への指向性から

文学研究科 博士3年 加藤 佐和子

『馬とその少年』（*The Horse and His Boy*, 1954）は、C・S・ルイス（C. S. Lewis）の『ナルニア年代記』（*The Chronicles of Narnia*, 1950-56）の刊行順で五巻目となる作品である。この作品はシリーズ内の他の六作品とは異なり、現実世界からの人間の来訪は起こらず、ナルニア世界内で完結する物語である。時系列の中では『ライオンと魔女と衣装箒筒』（*The Lion, the Witch and the Wardrobe*, 1950）の最終章に描かれる、ペベンシー（Pevensie）兄妹が治める黄金時代に起こった出来事であり、『銀の椅子』（*The Silver Chair*, 1953）では第三章で盲目の詩人によって語られる物語として名前のみ登場している。以上のような特徴から、この作品は「外伝」として位置づけられることもある。また、他の作品においては「回心」や「神への自己譲渡」がしばしば取り上げられ物語の核に据えられていたり、ルイスが『キリスト教の精髓』（*Mere Christianity*, 1955）の中で、キリスト教道徳において「最大の罪」であるとして言及した「傲慢あるいはうぬぼれ」が神学的主題として扱われたりしているが、『馬とその少年』では、これらの主題は扱われてはいるものの、他の作品よりは軽く、喜劇的な雰囲気を感じている。この外伝的性格と「軽さ」からか、『馬とその少年』は『ナルニア年代記』シリーズの他の作品と比べて、研究の軸に据えられることは少ない。

しかし、『馬とその少年』という表題が出版者によって選ばれたものであり、ルイス自身が執筆当初に付けていた表題は『ナルニアと北』（*Narnia and the North*）であったことや、実際には『銀の椅子』の前、つまり『夜明け丸の航海』（*The Voyage of the Dawn Treader*, 1952）の直後に書かれていたことは、この作品こそ、ルイス自身の信仰回帰への決意の背景を描いているという考えを後押しする。また、『ナルニア年代記』がキリスト教の神を想起させるアスランを中心にした物語であることを踏まえると、ルイスにとっての「神」とは何者かを知る一助となるこの作品は、シリーズ全体を通して重要な物語だということができる。

本発表では、『馬とその少年』に描かれる、若きルイスに「喜び」（joy）を与えた「北方」（the North）や北欧神話の要素についての考察を通して、またアイスランドの昔話との比較を通して、この作品の持つ価値を再確認するとともに、アスラン像を再考し、『ナルニア年代記』の持つ、キリスト教的アレゴリーとしての枠組みを超える意味を探っていく。

合同大会 発表要項

分野（英文学・文化）第4発表室（16-708 教室）

『シグルド』における物語の奪還

文学研究科 修士2年 金子 麻詩歩

The Story of Sigurd the Volsung and the Fall of the Niblungs（1876年、以下『シグルド』）は、ウィリアム・モリス（William Morris, 1834-96）が中世北欧文学 *Völsunga Saga*（『ヴォルスunga・サガ』）を元に執筆した翻案叙事詩である。モリスは、ストーリーの大筋は変えることなく、独自の解釈に則って因果関係や動機を加筆した。さらに彼は、内面を持つ個人として登場人物を造形し、叙事詩という枠組みの中で非常に近代的な物語を作り上げることに成功している。モリスの文章が冗漫だと捉えられがちなのは、原典『ヴォルスunga・サガ』の行間を読み、あり得たかもしれない複雑な内面や動機を丁寧に描いたからだ。

登場人物たちの中でもレギンの内面の豊かさは特筆に値する。レギンは本来、他者のために名誉ある行動をした人物であり、彼の名は語られるのにふさわしい。しかし時とともに彼の名誉は失われ、神々のものにされてしまった。その後、名誉、つまり語り継がれるべき物語の回復はレギンの行動理由の一つとなる。彼が試みた名誉挽回という動機は、人間中心的で、近代的自我を想定したものと言える。レギンが望むのは「奪還」であり、至極正当な行為ではあるが、矮小な個人が巨大な他者に挑むのは困難で、結果として卑怯で利己的な手段を取らざるを得ない。だが、挑み、挫折するレギンの姿は、近代的な人間観を先取りしており、現在の読者にも共感をもたらす。

物語の喪失、そして奪還の試みは、『シグルド』のテーマの一つであるだろう。さらに物語と英雄は不可分なもので、物語として語られることで英雄は永遠であり続け、死ぬことはないとされる。これらのことを念頭に、英雄シグルドに視点を移してみたい。シグルドは崇高な精神を持つ利他的な人物で、常にコミュニティのために行動する。しかし作中、シグルドは毒を盛られて虚脱してしまう。モリスは、記憶や感情、希望など、偉業を成し遂げるための全てを奪われたシグルドを、死者と同等の存在として描く。しかしシグルドは利己的にはなれず、奪われたものを取り返そうとすらできない。物語や英雄性とは獲得するものであるが、それが失われた時に、利己的で矮小な存在になってまで奪還しようとするか否かが、レギンとシグルドの大きな違いだと考えられる。作中しばしば、レギンとの対比によって、いかにシグルドが理想的な人物であるかが強調される。しかし、その対比によって、かえってシグルドの近代性の欠如が際立ち、シグルドは空虚で、感情移入しにくい人物になってしまう。本作品においては、近代的な個人として造形されたレギンのようなキャラクターにこそ魅力があり、それによって、作者の先駆性を指摘することができる。

合同大会 発表要項

学部生の部・発表タイトル（第4発表室 16号館 708教室）

欧州スーパーリーグ構想の失敗から見えるイングランドのサッカークラブとファンとの文化的つながり

教育学部英語英文学科4年 古仲 匠磨

早稲田大学英文学会（文学学術院）
早稲田大学英語英文学会（教育・総合科学学術院）
2022年度合同大会

コロナ禍における 第一言語獲得研究

講演者

折田 奈甫 氏・菅原 彩加 氏
（早稲田大学理工学術院 准教授）



司会

久野 正和 氏
（早稲田大学教育・総合科学学術院 教授）

12月3日（土）
16:00 - 17:30
早稲田キャンパス
14号館101教室

